美術
アート

素材の内なる声

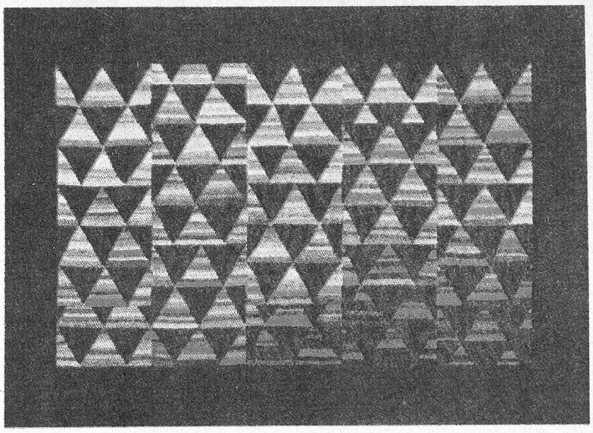
アメリカン・キルトから出発

作品を通して訴える

和紙・自然との対話

マリー・ライマン講演会から

永津禎三



The Delectable Mountain Series“Robe:Only From Afar’’（1981）

マリー・ライマンさん

和紙は、アメリカの多くの現代美術作家に興味を持たれ、さまざまな形で作品化されている。一九八三年に京都国立近代美術館で開かれた「新しい紙の美術—アメリカ」展は、この動向を強く印象づけた。

今回のマリー・ライマンの講演は、この紙による芸術というものを一般的に語るのではなく、自作品のスライドを見せながら話をすすめる形で行われた。

キルトから始まる

彼女の作品は、アメリカン・キルトから始まっている。そして日本の僧りょの着る袈裟（けさ）に、断片的な布地を継ぎはぎして作るという、キルトとの構造的な共通性を見いだし研究を始めることになる。今回の来日でも京都に滞在し、この袈裟を研究することを主目的としている。彼女の作品に一貫して流れるものは、キルトのもつ〈身をつつむ〉という意識である。

和紙の使われ方も紙衣（かみぎぬ＝紙子）からの発想である。古く紙衣は宗教的意味で質素な衣として主に僧りょによって用いられていた。これを知ってか、彼女の近作では布よりも紙の使用頻度が高まってきている。

一九七〇年代、アメリカは、ベトナム戦争、ウォーターゲート事件、オイルショック、公害問題等の社会状況から、内外ともに自信を失っていた。キルトなどのアーリーアメリカンの物が見直されてきたのも、そうした状況の中でもう一度建国当時の精神を取り戻したいという機運からであろう。

一九七一年にウィットニー美術館で開かれたキルト展は、そういった中で大反響をおこし、アートにしろクラフトにしろあらゆる表現メディアの中でもう一度人間の手で作るということの可能性を考えてみようという動きがでてきた。物質文明を信じ、テクノロジーを尊重する概念からでは、もはやどうにもならないところに来ていたのだ。

慰安と憩いの山

彼女の作品のシリーズ名となっている「歓びの山」はジョン・バニヤンが一六七八年に著した「天路歴程」の中に描写される、慰安と憩いを与える山である。そしてここから天界の門を垣間見せ、希望と道標を与える山である。宗教の自由を求めてアメリカに来た人々にとって、新天地の山々はまさに「歓びの山」であった。それは清教徒たちの精神状態を現し、アメリカン・キルトのブロックパターンの名称にも使われている。

彼女の一連の「紙の外套」は、地となる和紙に墨で線を引き、その上からいろいろな種類の布（時には宮古上布も使われる）や和紙を重ね、刺し縫（ぬ）いしていくという手順で作られる。いろいろな素材そのものの存在を認め、彼女の内なる精神の声と素材の内なる声が呼応した時、最小限度の手を加えることによって作品が成り立っている。ここで作者は自らが一つの素材となり、またそうなっている自らをも客観視している。

このような立場と捉えられる作家に、イギリスの彫刻家ディヴィッド・ナッシュがいる。彼の次の文章はこのことを語りつくしている。

「かつて早い時期には、私は材木工場で作られた規格品の木を使っていた。しかしそれらの木は自らがどこから来て、どこへ行くのか何も語りはしないことに気づいた。いま私は、樹木のところへ行き、その樹の時間と空間に応答することで、そしてその樹がそこにある環境、私がそこにいる環境に応答することでずっとうまくやっている。樹の大きさ、寒さと湿気、家からの遠さ、それらすべてがその状況を形づくっている。樹は新しい可能性の源泉となる」（ピラミッドとカタパルト、1981年より）

二つの要素もつ紙

紙はもともと二つの要素をもって成り立ってきた。一つは描かれる表面をもった紙として、一つはまさに紙という物質として。そしてもちろん後者が素材を再認識する現代の作家の興味を引くところであるが、その新しい美術素材としての使われ方にもまた（乱暴な分け方をしてしまえば）二通りある。

一つは既製の紙（その中に自然、歴史、伝統的用途を含む）を使うという。もう一つは紙を成形素材として立体にしろ平面にしろ制作の過程として紙を作る漉（す）くという。この成形素材としての使われ方は、キャスティングやバキュームフォーミングといったものが代表であるが、新しい紙の可能性を見いだそうとしながら、素材が手段化することで、実は素材の意味を失う危険を伴っている。

彼女は講演を締めくくった後、携帯して来た作品を床の上に広げて見せた。それを見た時の衝撃は、いったい何だったのかと、ずっと私は考えながらこの文章を書いている。ナッシュが示すように、さらに今回彼女が示したように、素材の内なる声を作家自身も一つの素材となって対話するような感覚は、本来われわれ日本人の側に備わっていたはずの感受性ではなかったか。自然の中に精神性を見いだし御嶽（ウタキ）と名づけ、そこに身を置く。こういう感覚を外からつきつけられた衝撃ではなかったかと。

◇ ◇

（マリー・ライマン　国際交流基金招へい研究員。七一年オレゴン大学で学士号・美術史取得、七五～七六年バーバラ・セデス女史に学ぶ。琉球放送文化講演会は2月21日、琉球放送ホールで、「和紙—現代美術に与えたそのインスピレーション」と題して行われた）

（ながつ・ていぞう　琉大美工科講師）